
シャッター

くちびるの赤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シャッター

【Nコード】
N6800K

【作者名】
くちびるの赤

【あらすじ】
あんた何色？僕は黄緑。アボカドの中身みたいな色。人はみんなそれぞれイロがあつて、僕はそれを見ることができんだ。大したことはできないから人付き合いに役立てて穏やかに生きてる。ある日、二年ちかく全国を放浪していたうちの姉ちゃんが帰ってくる。エネルギーで快活な自慢の姉ちゃんは見ると影もなく弱り果てていた。

姉ちゃんに何があつたのだろう？それを探っていくうちに、僕と同じイロの見える人たちと巡り合つてゆく…

明度1

わが水沢家のトイレには有名なサッカー選手のポスターが貼られている。

僕がまだ幼稚園児だったころ、泥酔したお父さんが見事なヘディングで便座正面の壁を陥没させ、あわてて貼られたものらしい。（ちなみに10年以上たつ今でも天然のお母さんは気付いていない）

そのサッカー選手はイギータというキーパーで、ボールに向かってスーパーマンの様に飛んでゆき、曲げた足のかかとでボールを弾き返すという神がかり的なセーブをすることで有名だ。

そのイギータの「サソリセーブ」を友達の小西に話すと「おれ、やってみる！」と言いだした。

体育のサッカーの授業、PK戦までもつれ込んだ緊張の瞬間。

小太りで走るのが遅いからキーパーになっていた小西は鋭く撃たれたボールに文字どおり飛んでいった。

ザシユウウツ！

ゴールネットに突き刺さったボールの前に腹から着地した小西がシヤチホコのように足を反らせ、鎮座していた。

しかも揺れている。腹の肉のせいがかすかに揺れている。

その後体育教師も大爆笑の渦に巻き込んで授業を続行不能にした小

西はけっこう人気者だ。サッカー部の友達がたくさんできたらしい。

「記録には残らないけど記憶に残る試合をした。とか言ってるんだぜ小西！パクリじゃねーか！」

「ふふ…」

まや姉はかすかに笑う。枕元のスタンドだけの薄明るい部屋で、僕は椅子に、まや姉はベッドに腰掛けている。バニラのお香がふんわり漂って家の外の暗闇に逃げていった。

「まや姉飯食べてないだろ？」

「食べたよ…もう寝なあんだ。１１時だよ」

僕がドアに向かうとまや姉は横たわった。

気付かれないように、僕は素早く何回もまばたきを繰り返した。カメラの連続写真の要領で、まぶたのシャッターを何度も切る。

バツバツバツバツ

すると、シャッターに合わせてまや姉の体からじんわりと青白い「イロ」がにじみ出てきた。

小さい手や白い腕や、丸襟のシャツから出ている首筋。まや姉の体全体を包むその「イロ」

しかしいくらシャッターを切ってもそのイロはセロハンの膜の様にうつすらそこにあるだけで、それ以上広がらない。水の底に沈んでいるガラスみたいなのはかないイロ。

ため息をついた。

（ほんとに飯食ってないな…）

「まや姉」

「んー？」

「カメハメ波あつ！」

僕は両手をまや姉に突き出し、満面の笑みを浮かべた。

「ばーか。早くいきな」

笑いながら布団に包まる。

「おやすみ、さく」

明度2

ドアを閉めて廊下に出た朔は軽い目眩がした。

（渡しすぎたかなー）

姉が帰ってきて1ヶ月。ほぼ毎日元氣のない姉にカメハメ波を発射している。

攻撃している訳ではない、自分の「イロ」を両手から姉に飛ばして渡しているのだ。

お父さんに抱えられて帰ってきた最初の頃なんかひどいもんだった。あまりの姉のイロの無さにあわてた朔はカメハメ波を連投しその場に崩折れた。

次の日ベッドの横でぶっ倒れている弟をみてまや姉はこう言ったものだ。

「ちょ、あんた大丈夫？」

（こっちのセリフじゃい！）

僕が幼稚園の頃、子供はみんなドラゴンボールが好きだった。

男子は外でドラゴンボールごっこをしてたし、悟空に憧れてカメハメ波の練習をしてたし、ジャンケンに負けてフリーザになるのを嫌がってた。（小西の魔人ブーは定評があった）

だからこれが普通だと思っていたのだ。

だつてまばたきをすれば友だち達から色とりどりの「気」があふれていたし、それをいちいち話したりすることもなかったから。

しかし今考えるとやはり子供はすごい。みんな身体中から「気」がほとばしってスーパーサイヤ人もびつくりの状態だ。大人になるとそういう人はごくまれになる。

「せんせーきょうきれいなピンクいろだね!」

「ありがと朔くん。でもこのズボンのみどりいろだよー」

みたいなささやかなすれ違いはあったけど、まあ朔少年は無邪気に育ってたわけだ。

でもある日決定的なことが起こる。

その日も幼稚園の庭でドラゴンボールごっこをしていた僕は、練習の成果でついにカメハメ波を撃てるようになる。

自分の手からヘロツと飛び出していったたまごくらいの黄緑の「気」が魔神ブー小西に吸い込まれていったのを僕は一生忘れないだろう。

「うっうっ撃てたー!!倒れるよ魔神ブー!」

ついでにその時の一瞬の静寂も忘れることができないだろう。

「さくくんナニいつてるの?」

「撃ったじゃんいま!ほらっ…波アッ!」

さっきより大きい、グレイプフルーツくらいのカメハメ波が小西のむちむちした腹に吸い込まれていった。

「見ただろー!」

「なにが？」

「カメハメ波当たったろ！」

「当たってないよ」

「当たったよ！カメハメ波当たったら倒れなきゃいけないんだぞ！ズルだ小西くんズルしたー！」

どうして小さい子はズルしたと言われるとムキになるのだろうか。小西もご多分にもれず顔を真っ赤にして突進してきた。しかし僕も必死だ。なんとしてもこのカメハメ波を認めさせるために魔神ブーを倒さなくては。

僕は渾身の力を込めて気合いの一発を放った。それはサッカーボール大の玉になって真っすぐ向かってくる小西の顔にぶち当たった。と、その時。

ストーン。と僕の腰が落ちた。まるで大事な糸が切れてしまったように。その糸は僕が呆気にとられている間にもプツプツ切れていく。ストーンストーンストーン。膝も、肩も全く力が入らない。

小西が僕の肩口をつかんだ。その時見た小西の「気」は凄いことになっていった。ただでさえ溢れださんばかりの気が柱のようにそびえ立っている。

黄色い小西の「気」。その所々が黄緑色にゆらめいている。

太いだけで運動オンチの小西がなんでこんなに力強いのか。力の入らない僕は人形みたいに小西に振り回されていたという。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6800k/>

シャッター

2011年1月27日10時03分発行